

# 戦争孤児

関係資料集成 第II期

全3回配本 全8巻

## 関西編 東光学園史料ほか

編集・解説 ◆ 本庄豊 (戦争孤児たちの戦後史研究会代表)・玉村久二彦 (京都女子大学発達教育学部教授)

協力 ◆ 社会福祉法人 東光学園・社会福祉法人 大阪水上隣保館

推薦 ◆ 山田朗 (明治大学文学部教授)・小野川文字 (北海道教育大学教育学部教授)

挿定価 ◆ 211,200円 (揃本体192,000円+税10%)

体裁 ◆ B5判 (1面付・2面付)・上製・布クロス装・総約2600頁 (各巻約330頁)

第1回配本 ◆ 第1・2巻 (全2巻) / 定価52,800円 (本体48,000円+税10%)

第2回配本 ◆ 第3・5巻 (全3巻) / 定価79,200円 (本体72,000円+税10%)

第3回配本 ◆ 第6・8巻 (全3巻) / 定価79,200円 (本体72,000円+税10%)

978-4-8350-8586-9 / 2022年12月刊行予定  
978-4-8350-8589-0 / 2023年5月刊行予定  
978-4-8350-8593-7 / 2023年9月刊行予定

※本集の構成・内容は変更となる場合がございます。  
お薦め先 ◆ 戦争史・戦後史・社会史・社会事業史・子ども学・児童養護、等の研究者。大学図書館・専門図書館など



### 好評既刊書!

## 戦争孤児関係資料集成 第I期 愛児の家史料 全5巻・全2回配本

「終戦からが地獄の日々のはじまり」ともいわれた、戦争孤児たちの過酷な状況を克明に伝える、はじめての本格的な史料集成! 「ママさん」とよばれた石綿貞代がはじめた「愛児の家」の、終戦直後からの膨大な史料。とくに「退所児童措置指導記録簿」には、児童の来歴、家族構成、孤児になる経緯、その後の成長までを詳述。戦争孤児研究のため、ほかに類をみない充実の史料群。続刊、「愛児の家 写真史料」も刊行予定!



【編集・解説】浅井春夫 (立教大学名誉教授)・良香織 (宇都宮大学准教授)  
酒本知美 (日本社会事業大学専任講師)  
【推薦】大友昌子 (前社会事業史学会会長)・本庄豊  
【協力】社会福祉法人 愛児の家  
【挿定価】115,500円 (揃本体105,000円+税10%)  
【体裁】B5判・上製・布クロス装・総約2000頁

第1回配本 第1-3巻 (全3巻)	約1200頁	定価69,300円 (本体63,000円+税10%)	978-4-8350-8372-8	2020年11月刊
第2回配本 第4・5巻 (全2巻)	約700頁	定価46,200円 (本体42,000円+税10%)	978-4-8350-8376-6	2021年2月刊
別巻1:「写真史料 愛児の家」		予価35,200円 (本体32,000円+税10%)		2023年1月刊行予定

配本	巻数	収録史料名 (表紙記載事項による)	記述年
第1回	第1巻	退所児童措置指導記録簿 (1)	1945~
	第2巻	退所児童措置指導記録簿 (2)	
	第3巻	退所児童措置指導記録簿 (3)	
第2回	第4巻	児童名簿	1947~
		育成記録 (1)	1954~
		育成記録 (2)	1954~
		育成記録 自昭和二十九年七月 昭和二十四年以降 里子関係書綴 中児関係書綴 (受)	1954~ 1949~
	第5巻	役員職員名簿 昭和二十年十一月一日起 (2) 来訪者 慰問団 名簿 自昭和二十二年七月起 金銭 (物品) 寄附控帳 自昭和二十五年年度 社会福祉法人関係書類 (正本) 自昭和二十七年 収益事業関係書類 CCF 及びバットセンター書類及び控帳 卒業者感想文綴 海外在留者 外国人在日外国人 書類綴 式拾六年度 書類綴 昭和二十五年 書類綴 昭和三十一年度	1945-1950 1947-1954 1950-1958 1952-1953 1947-1953 1957 1952-1975 1951 1950 1956

## 〈復刻版〉万寿果 全4巻【解説・総目次・索引附】

1930年代、日本のハンセン病政策の進展と、あたかも歩調を合わせるかのように生まれたハンセン病文学。北條民雄、明石海人、志樹逸馬はじめ多くの文学作品が生ま出された時代、植民地台湾の楽生院においても、大きく花開いた文学への想い。本誌『万寿果』には、日本人・台湾人を問わず、ハンセン病という病に向き合うことを余儀なくされた人びとの叫びが記されている。長島愛生園の『復刻版 愛生 (戦前編)』全15巻・別冊1と併せ、あらためてそこに生きた人びと、そこで生まれた作品に目を向けたい。

【解説】星名宏修 (一橋大学教授)  
【推薦】木村哲也 (国立ハンセン病資料館学芸員)  
田中 キャサリン (兵庫県立大学准教授)  
【協力】国立ハンセン病療養所長島愛生園・国立台湾図書館  
【挿定価】83,600円 (揃本体76,000円+税10%)  
ISBN978-4-8350-8543-2  
【体裁】A5判・上製・布クロス装・総約1,600頁  
【底本】『萬壽果』皇太后陛下御仁慈感激記念号-第10巻第2号 (1935年4月-44年1月、楽生院慰安会 発行)  
※未確認の欠号有。

不二出版  
〒112-0005  
東京都文京区水道2-10-10  
FTEL 03-5988-1670  
FAX 03-5988-1670  
001560022940054

表示価格はすべて税込

不二出版

編集・解説

本庄豊

戦争孤児たちの戦後史研究会代表

玉村久二彦

京都女子大学発達教育学部教授

平井美津子

大阪大学・立命館大学非常勤講師

推薦

山田朗

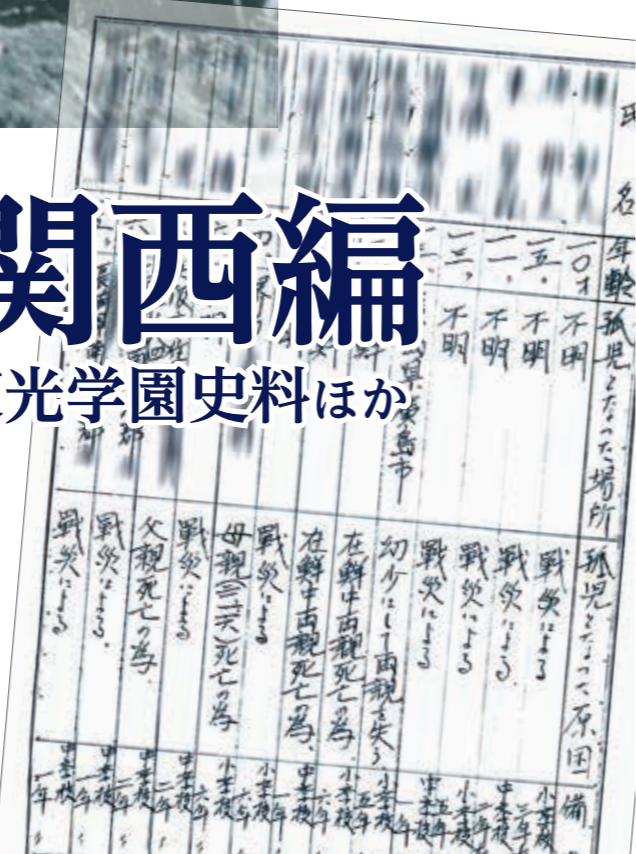
明治大学文学部教授

小野川文字

北海道教育大学教育学部教授

▼写真:朝日新聞社から寄贈されたヤギに対面。その乳は貴重な栄養源であると同時に、子どもたちのよい遊び相手でもあった (1950年代、東光学園蔵)。

▼資料:「孤児になった原因」は1948年時点で、圧倒的に「戦災による」ものだった。  
〔収容児童名簿〕『報告書綴 自昭和二十三年四月至昭和二十四年度』第5巻収録。



戦禍が子どもたちに残すもの

# 戦争孤児 関係資料集成 第II期

## 関西編 東光学園史料ほか

全3回配本 ◆ 全8巻 ◆ 各配本解説附

体裁 ◆ B5判・上製・布クロス装・総約2600頁

協力 ◆ 社会福祉法人 東光学園・社会福祉法人 大阪水上隣保館

関西における戦争孤児の実情を伝える稀有な史料「東光学園史料」を中心に、大阪で児童救済につとめた大阪水上隣保館、京都の八瀬学園などの終戦直後の史料を集成、復刻!

『戦争孤児関係資料集成第I期:愛児の家史料』と併せて、戦後社会が消し去ってきた戦争孤児の実態をいま、問い直す重要史料群。





### 本集成の特色

不二出版ではすでに、「戦争孤児関係資料集成第Ⅰ期 愛児の家史料」全20回配本・全5巻（浅井春夫ほか編）として、首都・東京における戦争孤児の実情を伝える「愛児の家」の史料を刊行した。だが、大陸からの多くの引揚者を擁した関西、ことに大阪の実態を伝える一次史料の欠落は、否むことができない状況であった。しかしこのたび、東光学園に現存する終戦直後の貴重な文書が確認された。本集成は、戦後の実情を生々しく伝える児童記録、行政文書、教育記録、学園紙「東光新聞」、また終戦直後から撮影された貴重な写真、さらに大阪水上隣保館、八瀬学園の資料、「収容保護事業十年の歩み」（梅田厚生館、一九五五年）も併せて復刻する。「戦争孤児たちの戦後史研究会」を通じて、筆舌に尽くせぬ戦争・戦後体験を伝えてきた本庄豊らの編集・解説によってよみがえる本史料からは、回想や伝聞にはない戦争孤児の「肉声」を聴きとることができよう。

不二出版編集部

# 本庄豊

## 膨大な一次史料はなぜ東光学園に残されたのか 刊行にあたって

### 本格的にはじまった「戦争孤児」研究

「戦争孤児」は、二世紀になって本格的にはじまった歴史研究のテーマである。

敗戦から二年あまり後、沖縄県を除く日本の孤児総数は一二万三二二二人とされ、うち一万三二〇二人が施設に収容されていた（厚生省「全国孤児一斉調査」一九四八年二月一日実施）。日本では学童疎開による親との分離が、都市空襲や原爆投下と相まって、孤児をつくり出す要因となっていた。戦争は膨大な「失われた子どもたち」を生み出す。旧満洲では、全人口に占める子どもの割合が過半数だったことは、意外と知られていない。生き残った旧満洲の日本の子どもたちは、「残留孤児」や「引揚げ孤児」となっていた。

近年、戦争体験者の高齢化が進み、証言が得にくくなったことで、元「戦争孤児」の方々の証言が注目されるようになった。「戦争孤児たちの戦後史研究会」の発足もあり、「戦争孤児」を取り上げるメディアが増え、彼ら彼女らの証言の裏づけとなる史料発掘が必要となった。だが、そもそも証言に依りてくれる「証人」の方々はひと握りであり、さらにその方々が、日記や写真などを残していることはきわめてまれである。

私たち「戦争孤児たちの戦後史研究会」は二〇一七年（平成二九）一月に発足、浅井春夫、川満彰、平井美津子、水野喜代志、本庄の五人を代表運営委員として「戦争孤児たちの戦後史」全3巻（二〇二〇―二二年、吉川弘文館）を刊行した。同書の「刊行のこぼれ」には、「戦争の反省は戦後政治史のなかで最も重要な総括がされないまま現在に至っており、あらためてこの時期に戦争孤児たちの戦後史を掘り起こすことは大きな意義があります。いま戦争孤児たちの戦後史に光を当てて、歴史をつなぎ、歴史をつくる研究運動を、仲間たちとすすめたい」と記されている。同じ思いは、浅井春夫・良香織・酒本知美の編集・解説による「戦争孤児関係資料集成第Ⅰ期 愛児の家史料」（不二出版、そして本集成にも貫かれている）。

### 当時の子どもたちの実態を示す史料発掘

新聞や雑誌、児童養護施設の「三〇周年記念誌」「五〇周年記念誌」などの二次史料と「戦争孤児」たちの証言には齟齬がみられることも多く、当時の子どもたちの実態を示す一次史料の存在は重要である。だがその多くは、記念誌刊行時や施設の建て替え時に破棄されることが多い。私が研究した京都の一時保護施設・京都府立伏見寮や孤児収容施設であった積慶園には貴重な一次史料があったが、量的にはあまりに少ないものであり、その全体像は描けないままであった。このたび東

このたび不二出版に東光学園史料の復刻をお願いし、「戦争孤児関係資料集成第Ⅱ期 関西編 東光学園史料ほか」をこのようなかたちで出版できたことに、あらためて感謝申し上げます。

東光学園は二〇一八（平成三〇）年四月一日に創立一〇〇周年を迎えました。一九一八（大正七）年二月、日本伝道隊（Japan Evangelistic Band）の招聘により、英国スコットランドの宣教師ジョージ・デンプシー（George Dempsie, 1883-1960）が来日、かねてより関心をもたれていた日本婦人の窮状を知り、帰国後、婦人救済活動事業、ジャパ・レスキュー・ミッション（Japan Rescue Mission, JRMと略）を設立したことが、本東光学園の源とされます。

しかし、その道のりはまさに厳しく、「波乱万丈」の年月でした。具体的事業は、一九二〇（大正九）年にデンプシー師が再来日し、大阪市天王寺を皮切りに東京府大久保で、「困窮した婦女子の自立更生」のためのJRMとして開始されました。そして二三（大正二二）年、関東大震災により建物は全壊、多くの利用者やスタッフが被害に巻き込まれました。そのため翌年、仙台市に移転、キリスト教育児院の土地の一部を譲り受け、「救愛館」として活動（三三年、廃止）。収容人数が膨れ上がり、子どもたちだけの収容施設として、二九（昭和四年、同市内に「ベラカ女児園」を開設（四一年、閉鎖）しました。

一九二七（昭和二）年には、大阪市中之島に「婦人救済相談所」を開設、三二（昭和七）年、現在地に土地を獲得、「慈愛館」の開設に至りました。そして四〇（昭和一五）年、国際情勢の急変によりJRMは解散、翌年、名称を財団法人東光学園と改め、初代園長に木川田正毅（きかわだ・しょうぎ、一九〇九―一九九〇）が就任。四二（昭和一七）年、国際情勢の悪化はますます厳しく、英国本部からの送金も途絶えます。加えて日本軍部の圧力で施設は接収、日本婦人錬成道場として利用さ

光学園において、まとまった量の一次史料が発見された。それまでは、証言を補完する意味での資料しか手元になかったが、証言がなくとも、史料そのものに歴史を語らせることが可能になったのである。

私を含む歴史研究者の多くは、高等教育機関で教える教育者でもある。学校現場でアジア・太平洋戦争を取り上げる時、「戦争孤児」を教材として同世代の少年・少女や若者の戦争犠牲性を扱うことは、生徒・学生たちに当事者性を呼び起こし、より深い歴史理解、平和認識へと導かれることを実感した。社会福祉研究者もまた、児童養護施設や障がい児施設の歴史を調べるなかで、そのルーツである孤児院の存在に行きあたりざるをえない。充実した一次史料が求められる理由である。

### 東光学園の一次史料はなぜ残されたのか

二〇二二（令和三）年九月、東光学園で「戦争孤児」関係の一次史料をみたとき、膝が震えたのを思い出す。段ボール箱百箱はあろうか。戦前戦後の史料群が私の眼前にあった。きっかけは同年七月、「戦争孤児」の番組制作のために読売テレビが東光学園取材、その際に担当ディレクターから助言を求められたことだった。そして、その後の放送をみて、私の目は釘づけになったのだ。たった一つではあるが、敗戦直後の孤児に関する史料が大きく映し出されたからである。「これはすごい史料だ」と直感した。その後、東光学園史料室の友井秀一さんを紹介され、東光学園に眠る戦争孤児関係の膨大な史料に触れることができたのである。

だが、東光学園の史料はなぜ残されたのだろうか。東光学園の初代園長・木川田正毅（きかわだ・しょうぎ、一九〇九―一九九〇）はこう記している。「記録は家庭に恵まれない児童養護の仕事を展開するために極めて重要なものである。しかも記録は施設がもつ社会的役割を展開するために、非常に大切な目的がある」。そしてその理由の第一に、「児童へのよい奉仕ができる」点を挙げている。注意深く作成されたこれらの記録こそは、「施設にとつて最も大事な宝物の一つ」であると。東光学園の貴重な史料は、ただ漫然と残されたのではなく、木川田の子どもたちへの強い想いに裏づけられていたのである。

歴史は多角的に語られねばならない。本集成に収録した東光学園をはじめとする史料は、戦争孤児が生まれた実情をより正確に理解するための重要な一歩となるだろう。本集成にはまた、多く言及されることの少なかった水上隣保館の年史、また八瀬学園創立当初の要覧なども収録した。この刊行によって、戦争孤児というもののより深い理解、そして新しい歴史学が展開されることを期待している。

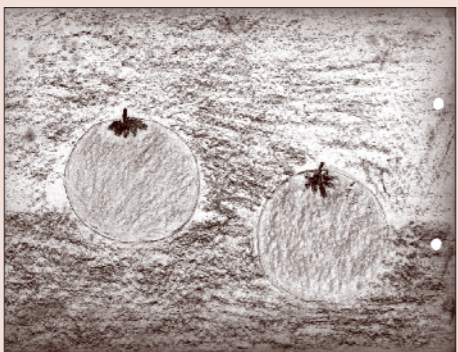
（ほんじょう・ゆたか 戦争孤児たちの戦後史研究会代表運営委員）

れることとなりました。キリスト教は敵国の宗教とされ、デンプシー師らは傷心の想いで帰国せざるをえなくなったのです。礼拝堂は倉庫となり、シンボルである十字架は取り外され、グラウンドの中央には土塔（村色の祠が祀られました。五〇余名の乳幼児を抱える利用者の方々とともに、職員たちも、大阪市立弘済院と博愛社に引き取られ事業は中止、苦難の道のが続きました。四五（昭和二〇）年、敗戦の後、大阪市杉本町に駐屯していた進駐軍の牧師、ヨセフ・ケラーマン（Joseph Kellermann）師の尽力により、東光学園は無条件で返還、戦争孤児、生活困窮児、国際児らの施設となり、本法人の社会福祉事業が再開されることとなりました。

このように東光学園は、時代に翻弄されながら今日に至りました。戦前、生みの親であるデンプシー師は帰国を余儀なくされ、JRMという名称も変更を迫られました。ルーツを示す創生期の文書も焼却され、「東光学園」という名称の由来もはっきりとわかりません。東光学園そのものも、ある意味、戦争孤児らの境遇と似ているのかも知れません。その名称も、新約聖書（「マタイ福音書」二一）の「東方の博士たち」に拠るのか、木川田正毅師の出身地であり、JRMの活動拠点でもあった東北の仙台を指すのか、あるいはデンプシー師の故郷、英国のスコットランドが日本からは東方にあたるためかなどと推察することはできますが、根拠となる文章（記録）は見つかっていません。今回の復刻によって、多くの方々が親を失った戦争孤児らの実情に触れ、当時の子どもたちや職員がその時代をどのように生き抜いてきたのか、その子どもたちの目に映った社会、大人の姿をどうみて、何を感じたかを読み取り、「ご自身で感じていただけると幸いです。何となく（わたなべ・じゅん 社会福祉法人東光学園理事長）

## 東光学園と戦争孤児

1918（大正7）年、日本伝道隊（Japan Evangelistic Band）に招かれたジョージ・デンプシー（George Dempsie, 1883-1960）が開始した婦人救済活動を淵源とし、41（昭和16）年、木川田正毅（きかわだしょうぎ、1909-1990）を園長とした「東光学園」（大阪府堺市）が発足した。戦中は大日本婦人会の錬成道場として接収されるが、46（昭和21）年3月に再開、孤児救済活動にあたった。日本聖公会に属し、聖ルカ教会を併設する。54（昭和29）年7月時点での収容児童数は295名にのぼったという。

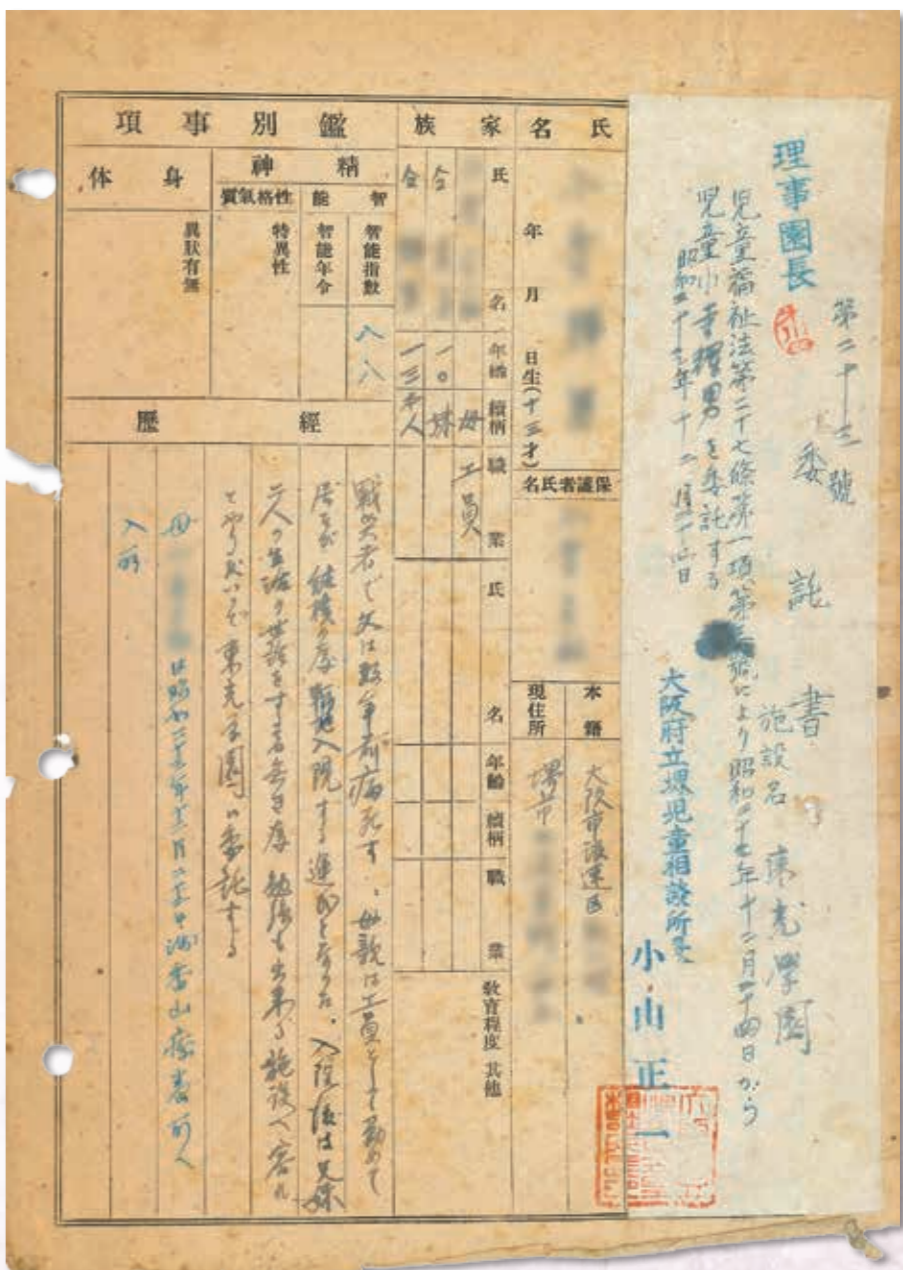


①：英文による東光学園パンフレットの一部（1955年？）。戦争孤児救済への尽力を伝え、海外からの援助を訴える内容。②③④：「園児図画作品」「性格並技能判定資料図画作品」（1948年）。本集成にはその一部を絵に収録。⑤園内で刊行されていた「東光新聞（とうこう）」。本集成には現存する1950年から64年までを収めた。

昭和二十三年五月  
性格並技能判定資料  
図画作品  
堺市東区津島小学校分校  
東光学園



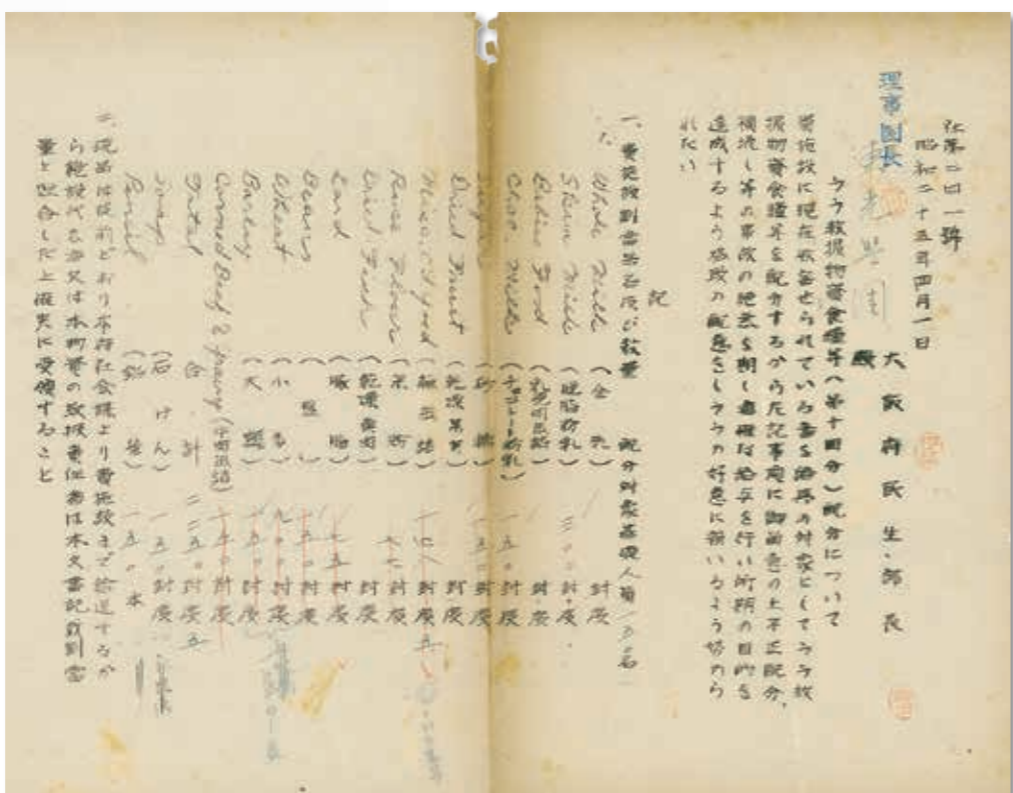
内容見本



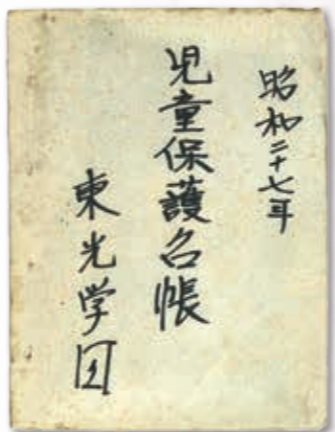
収録内容一覧

※個人情報に関する記述 運営内容に関する史料については細心の注意を払い、伏字なし部分収録とした部分がございます。  
※収録内容は、一部変更となる場合がございます。

配本	施設名など	巻数	タイトル	作成年
1	東光学園	1	昭和二十七年児童保護名帳	1952
1		2	昭和二十八年児童保護名帳(No.1)女	1953
1		3	昭和二十八年児童保護名帳(No.2)男	1953
2		2	昭和二十九年男子保護台帳綴	1954
2		3	昭和二十九年女子保護台帳綴	1954
2		3	昭和三十年度児童観察簿	1955
2		3	昭和三十年度児童保護台帳	1956
3		3	昭和二十三年五月 性格並技能判定資料 画作品 (堺市立東百舌鳥小学校分校)【抜粋】	1948
3		4	園児画作品【抜粋】	1948
4		4	昭和三年度ケース記録 女子盲3	1957
4		4	家庭日誌 昭和二十四年四月	1949
5		5	收容者転入転出控簿 自昭和二十五年一月一日至昭和二十六年二月二八日	1951
5		5	昭和二十三年十月ラ・ラ関係通牒	1948
5		5	報告書綴 自昭和二十三年四月至昭和二十四年度	1948
5		5	孤児浮浪児教育研究録 堺市立東百舌鳥小学校分校	1948
5		5	参考(様式其他)／事務費関係綴一九五一―一九五二ほか	1951
6		6	昭和二十九年年度報告書	1954
6		6	JOBK「春を待つ孤児達」台本	1949
6		6	昭和二十五年 放送日誌	1950
6		6	戦争孤児のための文書等／the story with an heat, american joint committee for associating Japanese American orphans, and letters	1955
7		7	東光学園案内／東光学園あんない／東光学園英文パンフ	1956
7		7	山ばとの子ら 特別学級の経営五ヶ年を顧みて(門永庄一郎)	1956
7		7	東光新聞(とこうしん)	1950-64
7		7	東光学園行事予定綴(昭和三―三二年)	1956
7		7	東光学園写真記録	1956
7		7	精神薄弱児施設 京都府立八瀬学園要覧	1953
7		7	昭和廿八年十月 保護教育概況書	1953
7		7	学習指導案	1955
7		7	昭和三十年十月 保護指導要覧	1955
8		8	【こども】創刊号(京都師範児童研究後援会)	1953
8		8	收容保護事業十年の歩み(大阪市立梅田厚生館)	1955
8		8	美しき幻を見ながら五〇年の歩み(水上隣保館)	1981



◆大阪府民生部長による「ララ救援物資食糧等(第14回分)配分について」『昭和23年10月ララ関係通牒』(第5巻収録)。そのリストは、「全乳」「脱脂粉乳」「チョコレート粉乳」「砂糖」「乾燥魚肉」「牛肉缶詰」「石けん」「鉛筆」など16品目に及ぶ。本簿冊には、大阪府民生部などが各施設に通達したララ関係文書を多数収録。ララ物資に関して、これほどまとまった通達類が保存されていることは極めてめずらしい。



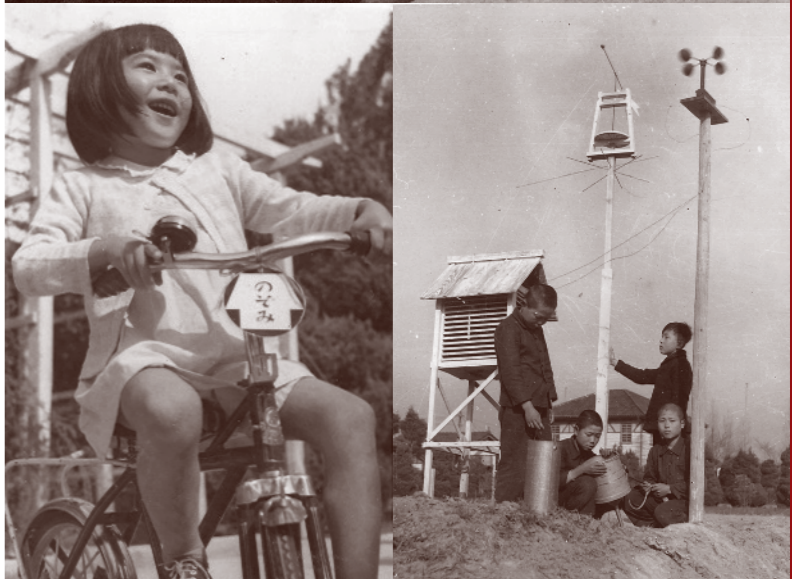
◆東光学園の児童記録のうち、戦後もっと古い簿冊『昭和27年児童保護名帳』(第1巻収録)の1部。児童の家族関係や保護経過を記した「保護台帳」、本籍地への照会、手紙などから構成。写真は大阪府児童相談所からの「委託書」と「保護経過」。本児童は戦災者で父が数年前に病死、工員であった母は結核を患い転地入院となり、この兄妹は1948年から52年にかけて入所。「まとまりのつかぬ事をよく話す」など、児童の性質や出来事を園長の木川田らが詳述した貴重な記録の数々。

年月日	事	項	指図の見解及所見
25.10.28	...	...	...
26.2.14	...	...	...
26.3.22	...	...	...
26.4.12	...	...	...
26.4.22	...	...	...
26.5.12	...	...	...
26.6.12	...	...	...
26.7.12	...	...	...
26.8.12	...	...	...
26.9.12	...	...	...
26.10.12	...	...	...
26.11.12	...	...	...
26.12.12	...	...	...
27.1.12	...	...	...
27.2.12	...	...	...
27.3.12	...	...	...
27.4.12	...	...	...
27.5.12	...	...	...
27.6.12	...	...	...
27.7.12	...	...	...
27.8.12	...	...	...
27.9.12	...	...	...
27.10.12	...	...	...
27.11.12	...	...	...
27.12.12	...	...	...

年月日	事	項	指図の見解及所見
26.7.12	...	...	...
26.8.12	...	...	...
26.9.12	...	...	...
26.10.12	...	...	...
26.11.12	...	...	...
26.12.12	...	...	...
27.1.12	...	...	...
27.2.12	...	...	...
27.3.12	...	...	...
27.4.12	...	...	...
27.5.12	...	...	...
27.6.12	...	...	...
27.7.12	...	...	...
27.8.12	...	...	...
27.9.12	...	...	...
27.10.12	...	...	...
27.11.12	...	...	...
27.12.12	...	...	...

◆上は「家庭日誌 昭和24年2月」(第4巻収録)。おそらく木川田の手になる冒頭の「手引き」には、「(児童の観察とは)児童が自発的に種々の場面で行動することを観て、それを察することによって得られる」と記されている。下、東光学園校内の放送部の手になる「放送日誌 昭和25年」(第6巻収録)。本集成には東光学園を舞台とした、NHK大阪放送局で放送されたラジオドラマ「春を待つ孤児達」の台本も収録した。





◆診療車、屋外遊戯、気象観測、ララ物質を前にしての写真。すべて東光学園所蔵。本集成にはこれらに加え、多くの貴重な写真を収録予定。

推薦します

## 山田朗

### 戦争犠牲者に光をあてる貴重な史料

戦争は社会的弱者を最大の犠牲者にする。多くの人々の生命が理不尽に奪われるだけでなく、たとえ生き残った場合でも心身がひどく傷つけられる。また、大人（保護者）が死亡したり、行方不明になったりすることで、それにつながる多くの子どもたちが、それまでの生活空間と人間関係のすべてを失い、悲惨な生活を強いられることがしばしばである。大人でさえ、食糧と住居を確保し、生き残るのに精一杯だった時代に、保護者を失った、あるいは保護者から見捨てられた子どもたちは、どのように生き、どのように学んで成長を遂げたのか。公文書としてほとんど史料が残されていないなかで、戦争孤児たちの足跡を復元することは、きわめて難しいことだといわざるをえない。しかし、このような苦難の時代を逆境のなかで生きた人々の足跡こそ、きちんと後世に語り継がなければならぬものだろう。

戦争孤児たちを育ててきた児童養護施設においても、史料が系統的に保存されていることは少なく、時代の流れのなかで貴重な史料・記録が散逸してしまった例も少なくないと聞く。また個人の努力によって残された史料も、収蔵されるべき場所に恵まれることなど、ほとんどない。史料集として刊行されることも、きわめて稀である。だが、近年、この資料集の編著者らを中心とする研究者・教育者の努力によって、戦争孤児研究は、戦争（戦災）史研究、戦後史研究、社会史研究、子ども史研究、人権研究のなかにはつきりと位置づけられ、注目をあびるようになってきた。こうした分野の調査・研究が進み、その史料の価値が認識されるようになると、さらなる未公開史料が日の目をみるようになると思われる。

このたび、『戦争孤児関係資料集第Ⅱ期 関西編 東光学園史料ほか』が刊行されることになり、これまで史料発掘がほとんどされてこなかった関西において、残されていたことが奇跡的ともいってよい史料群が収録されたことの意義は大きなものがある。これは史料の地域的空白を埋めただけでなく、関東との比較研究や関西の特色を明らかにする点でも大きな進展といえる。

この集成の刊行が、戦争孤児研究の新たな展開や孤児たちの足跡復元に活用される事を願ってやまない。

（やまだ あきら・明治大学文学部教授）

## 小野川文字

### 深くむすびついた障害児教育と戦争孤児

障害児教育を学ぶものにとって、その歴史は戦争と戦争孤児問題に深くむすびついている。例えば、一九四六（昭和二二）年、糸賀一雄（一九一四―一九六八）らが創設した近江学園も、戦災孤児・浮浪者と知的障害児の保護・教育を行う施設として出発している。

ところが戦争孤児、なかでも障害児についての記録は、これまで近江学園や八瀬学園などを除けば、私もほとんど知ることはできず、学校を続けることが困難、ある光学園の史料には「出生と同時に失明。原因は胎内での栄養失調」「生まれて目が悪く、最近では全然見えない。授業料が払うことができず、学校を続けることが困難」、あるいは「二三歳、IQ六四。不就学のためか検査に慣れていない……」といった記述が散見され、障害児の存在、不就学による学習困難の子どもも少なくないことがわかる。東光学園の子どもたちは、一九五一（昭和二六）年、園内に設置された大阪府堺市立東百舌鳥小学校の分校「山ばと学級」で五年間学ぶことになるが、その分校での知的障害児（当時の「精神薄弱児」）を対象とした教育実践と教職員の高い願いが、本校での特別学級の編成へとつながっていったことにも注目したい。

戦争孤児問題のベースには、「子どもへの無関心」がある（浅井春夫）といわれる。戦争孤児の保護は、それが「狩り込み」とよばれていたこと、そしてその対策の貧困さにあらわれている。東光学園は大阪で保護された多くの孤児を収容した施設であるが、食糧不足等の理由から、脱走も多かったという。

東光学園の職員が綴る生活の記録からは、入所時の子どもの様子や友だちとのやり取り、父あるいは母との面会時の様子などが、職員の間を通りつたリアルに伝わってくる。どちらかといえば、「こっそり盗み食い」「人の顔を常にうかがう」「不衛生」などの否定的な表現も少なくないが、それは子どもたちが生きるために必死で身につけた「技術」であろう。当時の劣悪な養育環境がリアルに想像できる。

それでも、月に一回綴られる「保護経過」記録からは、子どもたちが成長し、笑顔を取り戻していく姿に安堵させられる。「入園初期の陽気さがひそみ顔に淋しさが表れる様になる。やや暗いかげが見える。しかしいろいろ自己で努力している姿が見える」「落ちついてきた。小さいなりに環境に順応しようとする懸命な努力がよく見える」「学校が面白くなってきたらしく、よく帰宅後勉強して居るのを見かける。相変わらず小さい事をきにかけてよく泣くがすねることは殆どなくなった」（以上、「昭和三二年度 ケース記録 女子盲3」第4巻収録より）と。

東光学園に残されたこれらの貴重な史料からは、政府の貧困な対策と社会の冷酷な視線、子どもたちとじかに向き合いながら、その生命や育ちを守ろうとする職員たちの温かい視線など、「戦争孤児」の多面的な姿が読み取れる。ほかではえられない証言に満ちたこの復刻史料を、多くの方々に見ていただけたらと願っている。

（おのがわ ふみこ・北海道教育大学教授）